

パレスチナとクナーファとある日本人青年について 第四回

富澤規子

パレスチナと日本の人流

「クナーファ屋」店主である山田氏は、2022 年 3 月に一橋大学を卒業し、いよいよ製菓業に専念しだした。シェア商店「富士見トンネル」での営業は学生時代から継続していたので、この時点ですでに店舗営業は優に丸二年を超えていた。

次のステップに進むため、山田氏は全くあてもないまま、2022 年秋にはイスラエル行きの航空券を購入する。

なにしろ山田氏はコロナ禍の間に、国際協力や人道支援とのネットワークからやや遠のいている。山田氏のインスタグラム投稿を遡ると、イベント告知のほとんどが飲食系とのコラボレーションである。

学生団体時代にさかのぼってもパレスチナに関わる活動はなかったので、まったくツテもアテもなく、パレスチナ渡航を決意したのである。

そもそもパレスチナと日本では人的交流が極めて少ない。外務省による 2022 年 10 月 1 日現在の「海外在留邦人数調査統計」によると、「イスラエル及び西岸・ガザ地区など」の項目で長期滞在者と永住者の合計が 1253 名、うち成人は 803 名である。

日本国政府がパレスチナを国家承認しておらず、在イスラエル日本国大使館がパレスチナまでを管轄しているため合算した統計になるのだが、このうち大部分の邦人がイスラエル在住であろうことは容易に想像できる。

と言うのも、出入国在留管理庁による 2022 年 12 月 1 日現在の「在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表」によると在日パレスチナ人はわずかに 86 名、対して在

日イスラエル人は 694 名と大きな開きがある。在日パレスチナ人が極端に少ないにも関わらず、在パレスチナ邦人が多いとは考えにくいだろう。

テルアビブには日系企業も多く、NTT グループや Sony グループも進出している。一方、パレスチナ側とは中長期的支援構想である「平和と繁栄の回廊」への参加があるものの、民間日経企業の進出はほとんど報告されていない。

適切な修行地とはどこだったのか

だからこそ、山田氏は現地との関係の最初の一手をつかむために、無謀と言われてもパレスチナへ行かねばならなかったのだろう。自ら積極的に動かなければ、現地との関係はめぐってはこない。

このくだりを山田氏に聞いている時、私は無粋にも「周辺の比較的安全な国に行こうとは思わなかったのか」と質問してしまった。

シャーム地方は全体的に製菓技術が高く洗練されているため、名産地はパレスチナだけではない。2022 年当時のシリア渡航は困難としても、レバノンには有名な「AL Hallab」をはじめとした老舗菓子店がいくつもある。ヨルダンのクナーファはパレスチナの製菓法により近い。また、シャーム地方からは離れるが、エジプトでは内戦から逃れてきたシリア人達が「シリア菓子」を看板に掲げて菓子屋を開業し、甘いものの好きのエジプト人達を夢中にさせていた。

山田氏が最初に意識したのはシリアだった。

アラブ世界で製菓と言えばシリアであり、そもそも山田氏の中東への関心はシリア内戦がきっかけなので自然な発想ではあるのだが、2011 年の内戦勃発から現在に至るまでシリアはとても民間人が入れるような状況ではない。

そこで次の修行地としてパレスチナを検討し始めた。山田氏の日記には 2022 年 3 月、一橋大学を卒業する頃に初めて「パレスチナ」という言葉が現れるので、菓子職人

として腕を磨く道筋を考える段階で、「ナーブルス」という具体的な修行地が浮かびあがったのだろう。

2022 年のパレスチナはヨルダン川西岸地区で 3 月から 5 月の短期間にテロによる多数の死傷者をだし、2015 年以来の惨状となっていた。特筆すべき動向としては、山田氏が目指すナーブルスで 8 月頃に「Lions' Den（獅子の巣窟）」を称する新世代の武装抵抗勢力が組織されている。また 12 月にはパレスチナに対して強硬な姿勢をみせるネタニヤフ政権が発足しており、2023 年 10 月 7 日への前触れはすでに始まっていたとも言える。

しかし全土に日本国外務省の危険情報でレベル 4 指定され、退避勧告がだされているシリアよりは、パレスチナはまだ比較的安全な渡航先だ。特にヨルダン川西岸の「ジェリコ、ベツレヘム、ラマッラ及びこれら三都市とエルサレムを結ぶ幹線道路、西岸地区内の国道 1 号線及び国道 90 号線」は、危険情報のアーカイブを遡ってもおおむねレベル 1 の「十分注意してください。」である。山田氏の渡航日程に近いアーカイブでは 2023 年 2 月 28 日付けで「（上記を除くの）ヨルダン川西岸はレベル 2」、つまり上記地域はレベル 1 と確認できる。レベル 2 は「不要不急の渡航はやめてください。」でナーブルスはレベル 2 に含まれる。

パレスチナは修行地として安全なのか、そうでないのか。

だが、修行先をパレスチナに決定したのは、山田氏の支援家の一面のためだろう。パレスチナの為に何か自分にできないだろうかという自問が最後の後押しとなった。あまりにも抑圧された地域や人々への利他的な献身が山田氏の行動の根底にある。

より安全なレバノンでもヨルダンでもエジプトでもなく、渡航できる限りで支援をより必要としている地域を選ぶ。それが日本との人流がわずかで、アテすらないパレスチナでも、山田氏は行動せずにはいられなかったのだ。

きっかけはSNS投稿から

さて、山田氏は渡航の一週間前に、パレスチナ渡航のためクナーファ屋は一か月休業するとインスタグラムで告知した。

この投稿のなかで、修行先も何も決まっていなかったが、現地の製造者や生活者からクナーファへの理解を深め、運が良ければ菓子職人との知己を得たい旨を記した。

すると、その日のうちに思いもよらぬ反応があった。

クナーファ屋に来店したことのある日本人客が、助力してくれるかもしれないパレスチナ人の心当たりがあると言うのだ。



山田柊氏のInstagram@shuknafeh 2023年1月16日投稿より。

この投稿が1月16日、日本出国は1月23日。

この短期間で連絡が取れたパレスチナ人のアミン・アブアルソウド氏は、JICA の農業研修で北海道への来日経験があったほどの人物で、前述の僅かな数の在日パレスチナ人コミュニティにつながる一人だった。

しかもナーブルスに近いラマッラー在住である。

アミン氏の助力を得たことにより山田氏の漠然としたパレスチナ渡航は、ここで突然具体性を帯びた日程になる。

アミン氏とのやりとりは、自己紹介と渡航目的の説明から始まり、修行先となる菓子屋や現地コーディネーターへの紹介が一気に進み、日本出国の直前まで続いた。

パレスチナのラマッラーへ

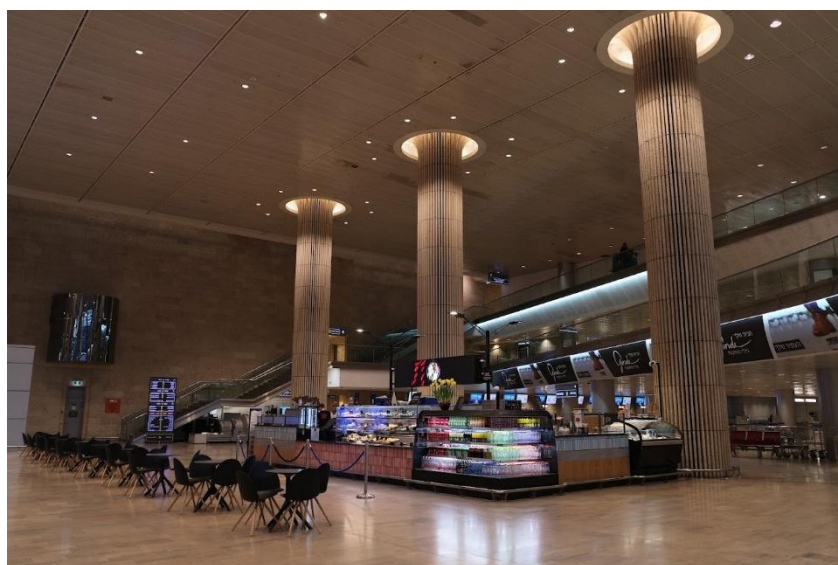
山田氏は 2023 年 1 月 23 日に成田から出国、チューリッヒを経緯して翌 24 日にテルアビブのベン・グリオン国際空港からイスラエルに入国する。

パレスチナ自治領には現在国際空港がないため、空路ならイスラエルを経由するしかなく、ヨルダンなどからの陸路であっても出入国記録はイスラエルのものになる。

山田氏のビザはイスラエル入国時に取得できる

90 日有効の、いわゆる観光

ビザである。イスラエルの出入国スタンプをパスポートに押されると、イスラエルを敵



ベングリオン空港。2023 年 1 月 24 日撮影

対国する国への入国を拒否される可能性があるので、別紙に捺印してもらうのが旅行者の常識なのだが、山田氏はスタンプを押されるタイミングすらなく、すんなりと入国できたようである。

山田氏はまずエルサレムで一泊し、25日にはラマッラーへバスで移動する。

ラマッラーは事実上のパレスチナの首都であり、テルアビブから直線距離で約 45 km ほど東南、エルサレムからは約 10 km ほど北に位置する。ナーブルスは行政上の中心地であるラマッラーとエルサレムよりも 30～40 km ほど北である。これらの都市間はバスが密に通っており、旅行者にとって移動は容易である。



アミン氏におごってもらったアブハムディ氏のクナーファ。ナーイメとキシユナの2種。2023年1月25日撮影

アミン氏に迎えられ、シャワルマとクナーファをごちそうになった。

パレスチナで初めて食べたこのクナーファが、修行先の一つであるアブハムディ氏の店のクナーファだった。

最初の数泊はゲストハウスに、その後、アミン氏から紹介された日本人現地コンサルタントの手配でラマッラーの家具付きアパートに入った。ナーブルスへはラマッラーから通い、夜間はラマッラーに戻るのが安全だろうと言うのが、アミン氏のアドバイスだった。ナーブルスへは「セルビス」と呼ばれる乗合タクシーで片道一時間ほどである。

山田氏は、ラマッラーに初めて入った途端にアンマンに戻ってきたような懐かしさを覚えたそうだ。

山田氏によるパレスチナの最初の印象は、街並みが綺麗で落ち着いており、人間的な温かさを感じたそうだ。特にラマッラーはアジア人に対するからかいもなく、街ゆく人々は穏やかだ。



到着後すぐに撮ったラマッラーの街並み。エルサレムからのバス停留所近く。2023年1月25日撮影

なにより焼き立てのクナーファがそこかしこにあることが、山田氏の心を躍らせた。

工房を備えた菓子屋は通りごとに1〜2軒あり、店頭には焼き立ての菓子を楽しむ人々の姿がある。山田氏によると、その数は日本のドラッ

グストアかコンビニエンスストアくらいの頻度で町の風景に現れ、おそらくパン屋よりも菓子屋の方が多いくらいではないかとのこと。

帰国後、富士見トンネルのクナーファ屋を訪れる客たちに、ラマッラーの写真を見せると、その整然とした一見平和な風景に一様に驚かれるのだそうだ。なにしろ、日本人一般にはパレスチナと言えばガザの印象があまりにも強い。そしてそれ以外の比較的平穏な日常風景は、日本へあまり伝わってこないのもまた事実だ。ナーブルスだけではなく、ラマッラーも菓子の町と説明されても、その実像を思い浮かべられる日本人がどれだけいるだろうか。

イスラエル建国以来の災禍に荒らされているとは言え、両市は長い歴史と伝統文化を持つシャームの重要都市のひとつでもある。

そういった情報の偏りを正すという点でも、山田氏の行動とその報告はとても貴重だと言える。



ラマッラーで宿泊したゲストハウス近くから中心部を臨む景色。

2023 年 1 月 27 日撮影

ラマッラーに行動の拠点を置き、アミン氏と言う現地での後見人を得て、山田氏のクナーファ修行はいよいよ始まるのである。

(写真提供：クナーファ屋店主 山田柊氏)

富澤規子（とみざわのりこ）

Ahram Canadian University (エジプト)言語翻訳学部日本語教師。エジプト文化省立大学校アカデミー・オブ・アーツ大学院にて民俗学準修士号取得。いたばしボローニャ絵本館翻訳おはなしボランティア。おはなし会シリーズに 2015 年から「アラブのヤそもシの木(新宿区立大久保図書館主催)」講師。